聴講生を受け入れて

――卒業三十年目の授業報告――

坂本敏彦

はじめに

東京の一般会社から兵庫県の高校教員に転職し、五里霧中で過ごした新任以来、毎日の自転車操業の授業に追われるうちに、いつの間にか三十年がたってしまった。現任校の定時制高校は、国語科教員は私一人。騒がしく、集中力のない生徒を相手に苦戦の連続である。ふと、かっての同級生や後輩はどんな授業をしているのだろうと知りたくなった。毎年、案内だけ貰って放置していた光葉会の夏の研究会に応募してみる気になった。大学紛争で授業にも出ず、卒業論文の発表会もなかった、これは、言わば私の最初で最後のつたない授業の実践報告である。

研究会の前々日、発表資料を大学に持参した。休み中のこととて構内に人はまばらだったが、誰に聞いても研究室のありかを「知らない」という返事が返ってきた。「え、有名な高国の研究室ですよ、知らないんですか?」私は絶句した。校舎や学生だけでなく、違う大学になっていたのだ。浦島太郎になった気持ちで寂しかった。小一時間もかかって捜しだし、発表資料を届けた。助手さんに親切に応対してもらい、主任の先生も気さくな方だった。少し安心した。

一、聴講制度の発足

現勤務校の定時制課程は、普通科と園芸科のくくり募集で、一学年一クラス、一年～四年まで生徒数は約百名。全国の定時制同様、生徒減で（ここ二・三年は不況のあおりか逆に増加）、その対策の一環として、地域住民を受け入れての聴講制度が数年前に始まった。すでに、園芸科、社会科が授業の中に聴講生を受け入れていた。私も、①現在の生徒だけでは一年間が見えてしまう授業に少しでも変化を持たせるため、②教材開発を通して、自分の現状を越えるために、昨年度から四年生の国語Ⅱの授業で聴講生を受け入れることにした（講座名は「文学入門」）。参加人数は約十名。老若男女、学歴もさまざまな人が応募してきた。

二、教材づくり

これまで私が読んだ小説や評論、過去の授業で扱った作品で、手づくりの教材に適した短篇の中から、「心を打つ作品、深く人生や社会を考えさせる作品」「表現の細部にこだわりながら文学の魅力に触れる作品」を書き出してみた。それに、肝腎の本科生の理解力や興味・関心をつなぎ留めることを忘れてはいけない。こうして、次が昨年度（平成十二年度）実施した「文学入門」の作品講読の記録である。

一　学　期

○樋口　一葉　「十三夜」「わかれ道」
○高　　史明　「生きることの意味（朗読）」
　　「失われたわたしの朝鮮を求めて」
○宗　　秋月　「ふるさと佐賀の裏切り」
○宮沢　賢治　詩「永訣の朝」
　　童話「なめとこ山の熊」
　　ビデオ「銀河鉄道の夜」
○野坂　昭如　「火垂るの墓」
○原　　民喜　「夏の花」
○石原　吉郎　「望郷と海」

二　学　期

○梶井基次郎　「檸檬」「闇の絵巻」
○与謝　蕪村　「春風馬堤曲」
○松尾　芭蕉　「野ざらし紀行」
○谷崎潤一郎　「吉野葛」

三　学　期

○大岡　昇平　「野火」
○国木田独歩　「武蔵野」

三、昨年度の授業の実際例

○樋口　一葉　「十三夜」「わかれ道」

夭折の作家であり、時代と家族の制約の中で生きることの切なさや苦しみが作中人物に見事に投影されている樋口一葉は、以前から授業にとり上げたいと思っていた。「十三夜」は、配役とナレーターを指名して読み進める。読み方で生徒の国語力はほぼわかる。最初の授業なので、生徒の様子を観察しながら読解していく。子供への愛に心は揺れながらも、夫のむごい仕うちに耐えかねて家出を決意して実家に戻った主人公「お関」に、父は子供の為、弟の為、親の為に家に戻るよう説得する。ワッと泣きくずれて翻意するお関。「下」では、車夫となっているかっての恋人「録之助」と再会する。背後を静かに照らす十三夜の月が印象的である。人間は誰も思うようには生きれない。過ぎた過去も取り戻しはきかない。それぞれを胸に秘めて今の現実を生きる「切なさ」。文学の魅力の一端を最初の教材で知って貰えたと思っている。「わかれ道」は最後の場面がよい。姉弟同然に慕っていた「お京」が妾奉公に行くと知って孤児の「吉」は、「後から羽がひじめに抱き止めて」ひき止めよう

とする「お京」に、「お京さん後生だからここの手を放してお呉んなさい」と言うのだった。「わかれ道」の題名の意味を生徒に考えさせながら、人と人との「出会い」、「結びつき」、「別れ」の主題を追っていった。どんなに大切な人であっても、同じ基盤が崩れたと悟った時、キッパリと拒むことで自分だけは孤高を保とうとする「吉」の言葉は、敢えて「一人」を選ぶ作者樋口一葉への共感と哀しみを私に覚えさせる。

○高　史明　「生きることの意味」
「失なわれたわたしの朝鮮を求めて」

在日朝鮮人二世として下関に生まれた作者は、母を早く亡くし、兄と共に父に育てられる。その前半生を筑摩書房刊の「生きることの意味」の所々を朗読しながら紹介する。作者のつらい思い出は涙なしには読めない。その後、評論「失なわれたわたしの朝鮮を求めて」に入る。朝鮮語しかしゃべらない父、日本語をしゃべる兄弟、一つの家庭に二つの言葉がとび交い、日本語をしゃべる子供が父には自分の抑圧者と同じ顔に見えるようになる。次第に父子の心は離れていく。その果てに父の自殺未遂事件がおこる。「父ちゃん死ぬな。」という作者の悲痛な日本語の叫びが父には届かない。このことを通して、自分のものになってくれない日本語を意識するようになる。日本語、朝鮮語、植民地、そして作者の生きた排他的、差別的な戦後の日本社会。生徒がそれらを考えるきっかけになったと思う。

○宗　秋月　「ふるさと佐賀の裏切り」

本教材を私が授業に取り上げるのは二度目であるが、短い文章なので全文を紹介してみたい。

ふるさと佐賀の裏切り　宗　秋月

窓外を流れる風景は、三年前の帰郷のときとさして変わらない。変わろうにも変われない佐賀は、観光開発しようにも湧きでる湯がなく、さしたる歴史上の人物も生まず、筑後平野の稔りだけが財源のくにであったから、目をつぶって汽車の通路にうずくまっていても、迫ってくるふるさとの形相は、容易に想像できた。

ガタンと汽車は一揺れしてホームに滑りこんだ。特急で大阪から佐賀まで十時間かかったわけだ。お土産を両手に握りしめながら、私はホームに降りた。十時間も車内で匂いを放ってきたお土産を入れた紙袋は、同席した客たちのしかめ面に見送られて、改札口を吐きだされた。このお土産は、生野区の朝鮮市場を前日に駆けずり回って買い求めてきた物であった。テゴ（タラのアラの塩辛）、コッチジャン（唐辛子と味噌を練りあわしたもの）、メンタク（棒タラ）の他、餅やナツメや朝鮮人参で張れあがった紙袋は、駅前でひろったタクシーの運転手の鼻をひんまげるくらいに強烈な匂いであった。

小城郡小城町上町。ふるさとの風景は窓外に流れ続け、我家の柳の木が見える坂の途中で停止した。

父ちゃん！柳の木の下の豚小屋を手入れしていた父が振り返り、驚いて立ちすくみ、手をあげて走ってきた。

母ちゃん！バラックの薄暗い土間で髪をすいていた母が、ぎゃぁ、と叫びながら抱きついてきた。

仕事を休んで待っていた弟は、二三の青年になっていた。

十六歳の春に家出をして以来、十有余年の大阪暮らしのうち、

帰郷したのは三回だけだったから、逢うたびに縮んでいく父母の身体や屈強な肉体労働者になっていく弟の身体が、目に痛い。

崩れ落ちる泥壁の上に貼ったというベニヤ板に、釘をうちこんで吊された金日成首相の写真を背に、父は焼酎を飲みながらお土産の塩辛に舌鼓を打った。忘れかけた味覚を舌にのせながら、若い頃いたことのある生野区の、あの場所はどう変わったか、あの人はどうしているか、と、質問してきた。

「ほんなごつ、生野は日本中の同胞の苗代ばい」

無学な父は日本語は九州弁、国語は済州島弁しか識らず、その済州島弁さえも九州弁のアクセントに近づき、目を細めて若い頃を回想している姿と、ひとり言は、私の胸を刺した。

父の細めた目に写っているだろう鶴橋のガード下の朝鮮市場は、通称をアリラン峠と呼ばれ、全国に散らばった朝鮮人が、血のつながりに逢いにきたとき、このアリラン峠で同じ故郷の人と出逢ったときの号泣を、肩を抱きあう姿を指して、誰言うともなくつけられたアリラン峠は、大阪市都市計画の着工で杭を打たれて通行止めになったのだ。その上、猪飼野という地名は名前さえも奪われてしまうのだ。が一体何が変わるだろう。高速道路が広がり、ビルがたち並んでも苗代は苗代のままだ。

酔った父はごろりと寝転んで、すぐにいびきをかきだした。昔の父はこうではなかった。開拓農民である理由と、朝鮮人である理由が負けず嫌いの父に他家より多い供出をさせたのであろう。稔りを期待できないのに納屋をがらんどうにさせて、咎める母を殴っていた。酒乱と人は恐れていたが、寝転んでいる今の父の姿からは想像もできないくらい精気がみなぎっていた。

山土をモッコで運び、トロッコを押していた開拓当時の父と、同じ父の口から「減反せんばいけん時世になったと」という愚痴を聞くとは思ってもみなかったから、毛布をかけてやりながら、私は涙があふれた。

母は私のために早めの晩飯の仕度をしている。井戸が水道になり、かまどがプロパンガスになり、車中から見たふるさとの形相は、変わっていないかに見えたが、水呑み百姓の我家の暗い土間にまで近代はきていた。

私の好物であるタカ菜漬をきざむ母の口元は叫びを内にこごめてきた、いやこごめなければいけないかった女の一生を物語るように、キュッとしまっていて、私はその口尻のしまりに、親が親であるべき、子が子であるべきものを見たようでほっと安堵したのだ。

翌朝、母の後について、村を二つ通りこした所にある寺の境内に足を踏み入れたとき、私は驚きのあまり声をあげた。

土まんじゅうに目印の石ころを置いただけの祖母と五歳で死んだ弟の墓が、石塔に変わり、金箔の文字の刻みは宗家の墓となぞってあるのだ。

「お前らに世話かけんけん年に一回は帰ってきて、あたあに花ばたむけんばいかんと」

母の声は寺の深閑とした空気を破った。

在日朝鮮人のほとんどが肉親の死後、死者の故郷に骨を持ち帰ろうとして、日本の土に埋葬せずに寺の納骨堂に安置するのだが、

忙殺する日本暮らしに骨は骨壺の中で溶けているのだ。
父母は自分の眠る墓を建てた。小高い山に登れば有明の海の見える九州の、佐賀の小城郡小城町の竹藪の横に墓を作った。
新潟のように外へ続く海ではなく、砂丘や砂州によって外海から断ち切られてできた湖の、円い地平線の見える町小城。
いくらか人工的な地平線のむこうに、翔んでいく羽をもたない昆虫の哀しみは、ふるさとを持たない人間には分かるまい。
ふるさと佐賀はふるさとではなく、しかし私のなかでふるさとであり続けようとする佐賀は、私を裏切り続ける。
私は金箔の文字をどうすれば裏切れるだろうか。」

本文にあるように、宗秋月は佐賀県生まれの在日朝鮮人二世の女流詩人。現在は大阪市内でスナックを経営し、長らく大阪文学学校に籍を置いておられた由。彼女が久し振りに「ふるさと」に帰郷した。父は開拓農民。私事になるが、実は私も開拓農家の子供である。戦後、時の政府は、海外からの引揚者など行き場のない人達を未墾の山林に開拓農民として入植させたのである。鍬による開墾の重労働の日々、食べるのがやっとの生活、雪が吹き込むバラック小屋。（昨年、野坂昭如が編集し、光文社が出版した『忘れてはイケナイ物語り』が上梓した。戦争にまつわるそれぞれの体験を全国から募ったものである。私の「開拓農家に育って」も数百編の応募の中から採用された。市販しているのでよかったら一読下さい）私の体験も紹介しながら宗秋月の本文を読み解いていった。「開拓農民である理由と、朝鮮人である理由が負けず嫌いの父に他家より多い供出をさせたのであろう。稔りを期待できないのに納屋をがらんどうにさせて咎める母を殴っていた」――彼女の父の意地は私には容易に理解できる。開拓地の多くは水の便が悪く、稲作には不向きなのである。自分の家がどれだけ米を供出したかは子供たちの誇りであった。私はいつも学校で肩身の狭い思いをしたものだ。米余りの今からは想像できない時代であった。「井戸が水道になり、かまどがプロパンガスになり、水呑み百姓の我家の暗い土間にまで近代はきていた。」――日本の農村の変化を的確に言い当てている。私の家も同じだったから。「母の口元は叫びを内にこごめてきた、いやこごめなければいけなかった女の一生を物語るように、キュッとしまっていて、私はその口尻のしまりに、親が親であるべき、子が子であるべきものを見たようで、ほっと安堵したのだ。」――日本の植民地統治下の朝鮮から日本に渡り、彼女の母は筆舌に尽くし難い苦労を重ねたに違いない。ギリギリの所で踏みとどまり、子供たちを育ててきた証しが口元のしまりなのだ。親の確かな姿は子供へのなによりの励まし。「翌朝、母の後について、村を二つ通りこした所にある寺の境内に足を踏み入れたとき、私は驚きのあまり声をあげた。」――彼女は何に驚いたのだろうか。父母が自分たちの眠る墓を建てたことが、どうして驚きになるのか。思うに、宗秋月は両親に墓を建てて欲しくなかったのだ。「在日朝鮮人のほとんどが肉親の死後、死者の故郷に骨を持ち帰ろうとして、日本の土に埋葬せずに寺の納骨堂に安置するのだが、忙殺する日本暮しに骨は骨壺の中で溶けているのだ。」――父母たち在日一世は心の中に朝鮮のふるさとを持っている。だが、宗秋月にはどこにも「ふるさと」はない。生

まれ育った佐賀の地をふるさととして拒む気持ちが彼女にはある。「新潟のように外へ続く海ではなく、砂丘や砂州によって外海から断ち切られてできた湖の、円い地平線の見える町小城。」――新潟港は日本海を隔てて朝鮮と向き合い、戦後、ここから北朝鮮への帰還船が出た。ここには、育った地の息苦しい閉塞感が語られている。「いくらか人工的な地平線のむこうに、翔んでいく羽根をもたない昆虫の哀しみは、ふるさとを持たない人間には分かるまい。」――ふるさとが水や空気のように自然にあるべきものとして、敢えて対象化しないですむ人は、実はふるさとを持たず、彼女のように絶えず「ふるさと」と向き合い、自分にとってのふるさととはどこにあるのだろうと問い続けて来た者こそ、その希求する心に於いて、「ふるさと」を持っているのだという逆説が語られている。私の場合も、父母からふるさとにまつわる楽しい思い出を聞かされて育った。そして、開拓一世として父母は苦労を重ねた開拓地に墓を建てた。しかし、私は宗秋月と同じように、「ふるさと」に複雑な思いを持っている。日本の農村の排他的、閉鎖的な風土の中で、開拓民の子としてよそ者扱いをされたつらい思い出もある。私の生まれ育った所を「ふるさと」として素直に語りたくない気持ちが今なお強い。宗秋月の文章を初めて目にした時、彼女の思いを読み解くのは、数ある国語教員の中で、「私が最もふさわしい」とすぐに思われたのだ。「ふるさと佐賀はふるさとではなく、しかし私のなかでふるさとであり続けようとする佐賀は、私を裏切り続ける。」――父母と共に苦労した「ふるさと」佐賀が彼女になつかしくない筈はなかろう。にもかかわらず、「ふるさと」ではないと拒む心。彼女の屈折したふるさとへの思いは、「在日一世を引き継いだ在日二世以降の世代の原点であり、同時に、戦後も戦前と何一つ変わらない狭隘な日本人や日本社会への痛烈な批判として、読む者に響いてくるではないか。

○石原　吉郎　「望郷と海」

十年近く前になるが、担任学年の生徒の一人が病死した。卒業式で答辞を読んだ生徒が原稿を書いてきた。その中に、「あなたの人生の分まで私達は生きていきます」とあるのが気になった。「人の人生を生きることが可能なのだろうか。」私はやんわりと感想を述べた。その人の悲劇はその人だけのものである。同情や憐憫を峻拒したところに、その人だけの哀切な悲しみが伝わってくる。本屋でふと手にした「望郷と海」によって、私は多くのものを石原吉郎から教えられた。一学期最後の教材として、「望郷と海」を読んだ。「ある共生から」「沈黙と失語」「ペシミストの勇気」――シベリア抑留八年間の体験から発せられる、人間存在の根源を問う言葉にうたれる。重労働と絶対的な食料不足、いつ果てるともわからない収容所生活。極限を生きながら、なおかつ「人間」として踏みとどまろうとした人の存在は、ともすれば人生の節目で押しつぶされそうになった私に勇気を与えてくれた。労働の休憩時間、言葉もなくアンガラ川の一支流の側にすわり、流れをみつめる石原吉郎の姿が、はっきりと目に浮かんでくる。

○与謝　蕪村　「春風馬堤曲」

蕪村は摂津の国、毛馬村の出身。早春のうららかな一日、藪入りで郷里へと帰る娘さんと淀川の堤みで一緒になり、彼女に代わって道中の春の風物や望郷の思いを述べる。「郷愁の詩人」と呼ばれる蕪

村の神髄が如実に表れた佳作。私が教材として最もとりあげたい作品の一つである。発句風の短詩や漢詩の組み合わせが、不思議なリズムを生みだしている。「やぶ入や浪花を出て長柄川」「春風や堤長うして家遠し」ここまで読んだ時、聴講生の一人が「あー」と大きな声を上げた。何でもこの句が郷里の淀川の堤に石碑として建っており、子供のころ川遊びのたびに目にしたとのこと。その思い出が甦ってきたらしい。最後の場面が実にいい。夕暮れ時、わが家の前にお母さんが娘の帰宅を今か今かと待ちわびているのが遠く目に入る。「矯首はじめて見る故園の家黄昏　戸に倚る白髪の人弟を抱き我を　待つ春又春」――春たけなわの風物の中で行きつく先に母が待っている。ロマンチスト蕪村の至福の時なのであろう。最後の句が又良い。「君不見古人太祇が句　藪入りの寝るやひとりの親の側」その夜は久し振りに母とふとんを並べて寝るのだ。十八首の作品を道中を楽しみながら、ゆっくりと歩いて授業を進めた。聴講生にも喜んでもらえた作品である。

○松尾　芭蕉「野ざらし紀行」

○谷崎潤一郎「吉野葛」

「野ざらしを心に風のしむ身かな」

「秋十とせ却って江戸をさす故郷」

芭蕉は四十の年、最初の紀行文「野ざらし紀行」の旅に出る。故郷、伊賀上野を訪ね、母の遺髪に涙し、吉野に遊ぶ。山中深く分け入って、敬慕する西行の庵跡に往時をしのんだ。

「露とくとくこころみにうき世すがばや」

ところで、私も寓居から比較的近いので、よく吉野を訪ねる。吉野川の上流で釣をし、奥吉野に足を延ばして芭蕉の感動を追体験するのを楽しみにしている。二学期に吉野を舞台にした。「野ざらし紀行」と「吉野葛」を扱った。近鉄の観光地図やテクテクマップなどを利用して地名を確認しながら読み進めた。谷崎の「吉野葛」は南朝滅亡の哀史を背景にして、義経、静御前の故事や遺品、津村君の母の出自の謎解き、晩秋の吉野の自然、などが響き合って、吉野の魅力が余す所なく語られる。途中、作品中の柏木部落が生徒の一人の父親の出身地とわかり、教室の一同が驚く場面もあった。又、生徒の何人かも、例えば、入之波温泉に湯治に出かけたり、吉野の桜狩りの経験があったりして土地勘があり、興味を持って授業参加してくれた。

四、今年度（平成十三年度）の授業の取り組み

今年度も昨年度に引き続いて、四年生普通科の国語Ⅱ（講座名は「文学入門」）の授業の中に聴講生を受け入れた。ちなみに、四年生六名、聴講生十名である。これまで読んできた作品は、

一　学　期

○現代短歌――抒情の前線

○立原えりか　「アイスキャンデー売り」

○柳田　国男　「峠に関する二・三の考察」

「浜の月夜」「清光館哀史」

○天声人語――「雁風呂」

○浅田　次郎　「角筈にて」

○宮本　輝　「泥の河」

二　学　期

○近代・現代の詩

萩原朔太郎――竹、蛙の死、およぐひと、猫、青樹の梢をあふぎて、艶めかしい墓場、遺伝、漂泊者の歌、帰郷

中原　中也――サーカス、冬の長門峡、帰郷、汚れちまった悲しみに、朝の歌、一つのメルヘン

石垣　りん――私の前にある鍋とお釜と燃える火と、崖、くらし、弔詞、シジミ、表札

茨木のり子――根府川の海、六月、わたしが一番きれいだったとき

黒田　三郎――死のなかに

田村　隆一――見えない木、帰途

鮎川　信夫――死んだ男、繋船ホテルの朝の歌

○夏目　漱石　「夢十夜」

である。聴講生受け入れも二年目に入ったが、昨年度に引き続いて何人かは聴講生として今年度も残り、昨年と同じ教材を使うわけにはいかない。私の三十余年の教材の蓄積と新教材開発の力量が問われているのだが、それが自分の停滞を越える道なのだと思い、公立の図書館通いを続けている。今年度の授業の実際を、一、二紹介する。

○「抒情の前線」と命名して、平成十二年度NHK全国歌会入賞作品（No1～10）と朝日歌壇優秀作品（No11～17）をプリントしてみた。今年度初の授業なので、軽いウォーミング・アップのつもりで肩ひじ張らず気軽に読んだ。

1、四十二の父に初潮を習いしは母を焼きたる十三の夏
2、五階には瀕死の人ら四階に今日生まれたる子等眠りおり
3、何かこう夢のつづきを見るような母の瞳に合う日に幾たびも
4、やがてくる別れに触れず老父と秋の上野にフエルメール見る
5、大学か調理の道か迷いたる孫ははじめての月餅を焼く
6、初婚にてにわかに四人子もつ決意告ぐれば君の頭を深く下ぐ
7、閉店セールの店は静かに賑わいて食器の触れあう音のみひびく
8、コンビニが潰れた後にコンビニが出来てちっとも困らない町
9、戦争を知らない子等として育ち白髪を染めて職場へ向う
10、絶ちがたき想いいずこに捨てるべき傘の滴を一振りにふる
11、新しき鉛筆削る雪の夜を森の香りのひろがりてきて
12、天に目をもどしては又乳にもどるこれがこの子の全宇宙かな
13、わが嘘のひとつひとつを頷きて末期の弟の眼するどし
14、湯の中に二十数えて蒸し芋のごとき幼をタオルに包む
15、モノクロが静かに伝える学徒兵悲しきまでに銃口そろう
16、真青な空に足場を組んでいた人が静かに下りてくる昼
17、紙一枚ゆっくりめくりゆくさまに風は湖面の色変えてゆく

授業で解説した私の寸評。①の歌は重い現実を詠み衝撃的。一首の中に沢山のことを取り込んでいるのでやや焦点ぼける。②の歌は生と死の入れ変わりを淡淡と詠む。「場所はどこか」と生徒から質問が飛ぶ。「さあ、アパートかな」と答えたら、別の生徒（四年生）から「病院ちゃうの」との疑義が起こる。私が一本取られた。⑦の歌、「店は静かに賑わいて」が「閉店セール」を的確に表現している。

⑩の歌は上の句の心の内面が下の句の具体的動作とぴったり繋がる佳品。⑪の歌も「雪の夜」の背後に「森の香」が広がり、感覚的な奥行を感じさせる素直な良い歌である。⑯と⑰の歌はイメージが鮮明に浮かんでくる。十七首の中には平凡な歌もいくつかあるが、投稿歌としては、この辺りが今日の最前線なのであろう。この中から私が三首採れば、⑩⑪⑰の歌。生徒たちには⑧の歌のようなわかり易いものが好評だったようである。ともあれ、今年度最初の授業で、導入教材としての肩ほぐしの役割は果たしてくれたと思う。

○二学期は近代詩、現代詩を扱った。その中で、戦後詩の出発を特徴づける詩人として、鮎川信夫、黒田三郎、田村隆一の「荒地グループ」三人をとり上げてみた。鮎川信夫の「死んだ男」は、心ならずも情況への参加を強要される鬱屈した青春と、Mの無意味な戦死を描いている。「M」の生と死を問い続けることが遺言を執行することなのだ。「繋船ホテルの朝の歌」は私の好きな詩。ホテルとなった繋船は再び航海することはない。次の朝、青い海を疾走している船を夢想しても、額縁にはめこまれた窓の風景は元の「倦怠の街」である。「はかない希望と夢」は「ガラスの花瓶に閉じこめられて」しまった。「黒い鉛の道」の果てに広がるのは「荒地」なのであり、空虚な現実と戦後の閉塞情況にとり込められながら詩作を続けるほかない。それは、「平成」の今を生きる私の窒息感とも重なるものなのである。

終わりに

研究会の当日は、朝から晴れた暑い日であった。広いキャンパスにビル風の校舎が整然と並び、程よく植えられた街路樹が濃い緑陰を落としていた。会場の大講義室はほぼ満員であったが、見渡しても見知った顔は一人も見付けられなかった。昼休み、大槻先生を見掛けて挨拶した。先生は遠くを見るような眼差しで返礼された。不肖の学生であったから果たして思い出して貰えたか、どうか。かっての学生時代、広島市内のパチンコ屋で偶然隣の台に立ったことがあった。お互い気が付いて、ニヤッと笑ったのを覚えている。隣の先生を意識してその日は玉の出が悪かった。後輩たちの発表は、各自が置かれた学校での授業の実践や、今取り組んでいるテーマの紹介であり、それぞれに熱意が感じられ良かった。若い力が確実に育っていることを実感させられた。私の発表は午後の一番手であったが、さすがに緊張した。大要は押さえたつもりであるが、説明不足の所もあり、後輩たちにうまく伝わったかどうか自信がない。壇上に立つうちに、かっての東千田町の旧大講義室が甦ってきた。スト続行を決めた教育学部の学生大会。大学当局の要請で会場になだれ込んできた機動隊員との衝突。怒号と悲鳴のうちに、我々は会場から強制排除された。気持ちの整理がつかないままに、大学闘争の終局を迎え、その中途半端な気持ちを抱えて社会に出て、人生にはっきりとした目標が見つからないままに今に到ってしまった。そうして、自分なりの授業方法論も教材論も確立できないうちに、早

くも教員生活の終幕を迎えようとしている。しかし、畢竟その模索の連続こそが人生なのではないか、と不甲斐ない自分を慰めている。ともあれ、三学期も自信を持って生徒に提示できる教材を開拓しなければならない。納得いくまでの細部の読み取りもいる。図書館通いの日々が当分続きそうである。

（大阪府立農芸高等学校、定時制）